

シナイ通信

第13号

平成20年9月30日

NP0 法人 シナイモツゴ郷の会

TEL/FAX(0229-56-2150)

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



シナイモツゴ郷の米 (さとのまい) 認証スタート

農業者主体に「郷の米づくり手の会」が発足、販売開始

当会によるシナイモツゴ郷の米の認証作業が進められ、認証米が10月から販売されます。呼びかけに応じて6月に「かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会」が発足し、郷の米を栽培して、産地直送で販売することになりました。シナイモツゴ郷の米はシナイモツゴが生息するため池の水でシナイモツゴを護る農業者が生産し、シナイモツゴ郷の会が認証した安全・安心でとてもおいしい環境保全米です。この制度は、消費者がシナイモツゴ郷の米を購入して豊かな自然の恵みを楽しみながら、米価暴落にあえぐ農業者の自然再生活動を支援することを目的としています。

郷の米の生産と認証

この制度はH18年から検討され、様々な議論を経て、H19年7月に要領が定められました。それ以来、生息池周辺の農業者と意見交換しながら、認証制度のあり方について検討してきました。

今春、シナイモツゴが生息する2つの地域の農業者など9人により「かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会」が発足しました。会員の稲作農業者がシナイモツゴ生息池の水を使用して、減農薬・減化学肥料で栽培しています。

当会はこれまで6月と8月に合計2回、栽培水田を調査して用水の利用状況や水質を現地調査し、さらに栽培記録から農薬や化学肥料の使用状況を調査しました。同時に、用水として使用しているため池でシナイモツゴの生息調査を9月に実施し、それぞれの地域の2つのため池で生息を確認しました。調査結果を踏まえて10月上旬には認証発行の予定です。

最近、横行している偽ブランド米の増加に対応するため、認証米には販売用の袋に当会発行の認証ラベルを貼付することになっています。ラベルには通し番号を記し、生産ロットを識別できるようにしています。

郷の米は安全・安心そして美味

シナイモツゴは里山の水源地のため池で生きてきました。郷の米はこの水をそのまま使って栽培した安全・安心な環境保全米です。里山のため池の水を

かけ流して作った米は食味も抜群です。米は宮城のブランド品種「ひとめぼれ」です。シナイモツゴ郷の米の新米の風味を十分に味わえば、豊かな自然の恵みを実感できます。

自然再生になう農業者を支援

シナイモツゴが生息できるようなため池は清浄な水を供給し、魚類以外にも多くの昆虫などの生物を育むのでとても大切です。ため池は全国で20万個もありますが、このようなため池は数えるほどに減少し、保全と拡大を図る必要があります。



シナイモツゴ郷の米
の稲穂で休むイナゴ

シナイモツゴの生息池を護ってきた人々は、沢地の狭小な水田を耕している零細な農業者です。今、彼らは米価の暴落に追いつめられ、将来に不安を抱いています。彼らが生産する米を正しく評価して購入することで、今後も農業を続けてため池を護ってもらうことができます。

かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会をよろしく

食と農を見つめ直し、自然再生の為に今出来ること...

<会報 第1号 平成20年8月25日発行>

宮城県大崎市かしまだい

さと まい

シナイモツゴ郷の米 通信



「ぶっくらと、丁寧に！」

米価の下落や農村社会での後継者不足など、昨今の農家を取り巻く状況は一段と厳しさを増し、食料自給率の低下と併せて、もう一度地域に根ざした米作りを見直そうとの動きが広がっています。

持続性のある農業と地域の環境保全の為に、あわてずじっくりと丁寧に米を作り続けたい！それが、私たちの願いでもあります。小さな取り組みが、頑張る農業者と地域の自然再生に活力を育む、そうした想いでこのプロジェクトはスタートしました。「シナイモツゴ郷の米」みなさんよろしくお願いたします。

☆シナイモツゴ郷の米

絶滅の恐れがある大崎市指定の天然記念物シナイモツゴの保護に努めながら、水環境のパロメーターでもあるシナイモツゴが棲息するため池の水を利用し、まごころ込めて栽培した安全・安心な環境保全米です。

一私たちは今年の新米を、次の「約束」でみなさんに届けます。

1. 農水省のガイドラインに定められた環境保全米（減農薬・減化学肥料）での栽培。
2. 「NPO法人シナイモツゴ郷の会」の認証制度で認められた農業用水を使用。
3. 検査基準は1等米品質。
4. 玄米は全て色彩選別しての出荷。
5. 「つくり手の会」から、お手元まで産地直送・産地販売。
6. 水環境を守るため池の管理・維持活動を継続的にやっている。
7. 地域を守り続ける強い信念。

以上7つの「約束」をふまえたお米づくりをモットーに「シナイモツゴ郷の米」が今秋誕生します！

「つくり手の会」発足しました！

ブランドとは「信頼」...このお米をつくるにあたって多くの方々に世話になりました。いざ始めてみると認証や栽培方法、精米や出荷などの基準作りなどなど、多くの課題が山積しました。

何度も会議を重ね、お米への想いを結実させるために、いよいよ会員9人での「かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会」が発足の運びとなりました。

今年は、生産者が深谷地区で3人、広長地区で2人、面積は約3町歩で環境保全米として「ひとめぼれ」を栽培しています。

まだ始まったばかりの小さな取り組みではありますが、地域の食料は地域がしっかり育て、地域を支える想いを大事にしなが、新しい魅力をみんなで作って、みなさんの支えで大きな輪になるように頑張ります。



ため池の保全活動（広長地区）

シナイモツゴ郷の米 予約受付中です！

キロ数	玄米価格(円)	白米価格(円)
2kg	800	900
5kg	2,000	2,200
10kg	4,000	4,400
30kg	12,000	13,200

【ひとめぼれ
平成20年産】

詳しくは事務局
までご連絡頂ければ幸いです。

●つくる人・食べる人・みんなの力で地域の環境と農業を守り続けるために！

◆ご予約・お問い合わせは「かしまだいシナイモツゴ郷の米つくり手の会」事務局 菅井 博 まで。

〒989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚字福芦464-28 TEL&FAX/0229-56-5746

E-mail/h-sugai@mub.biglobe.ne.jp

<http://satonomai.jp/>

自然再生米作りフォーラム

鹿島台で開催

地域の宝**豊かな自然**を守る農業者を支援するため、
先進事例を紹介し、自然再生の方策を語り合います。

シナイモツゴ郷の米、ひしご飯、宮城野ポークの試食会もあります。
多くの方々の参加をお待ちしています。

主 催：NPO法人シナイモツゴ郷の会
共 催：大崎市
後 援：日野自動車グリーンファンド、JAみどりの
場 所：鎌田記念ホール 多目的ホール（大崎市鹿島台）
期 日：2008年10月11日（土）13：00～17：00



コウノトリと共生する豊岡市

講演

- コウノトリの郷米：コウノトリが農業の力を取り戻す（兵庫県豊岡市コウノトリ共生課）
- ブランド米による自然再生活動（シナイモツゴ郷の会）
- ふゆみずたんぼ米（ふゆみずたんぼ生産組合）
- 鳴子の米プロジェクト（鳴子の米プロジェクト会議）
- シナイモツゴ郷の米（さとのまい）（かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会）

試食会(無料)

- シナイモツゴ郷の米おにぎり、品井沼ひしご飯、宮城野ポーク豚骨スープなど
（大崎市食生活改善推進員鹿島台会）

シンポジウム 魚類復元による田園の自然再生

11月 東京 立教大学池袋キャンパスで開催

当会は2004年以来、水辺の自然再生をテーマとしたシンポジウムを毎年、大崎市で開催してきましたが、東京で開催し直接全国へ発信すべきであるとの要望に応え、各方面からのご協力を受けて東京開催が実現しました。

1. 趣 旨

平野部の水域では、河川の改修、農薬使用、ほ場整備、外来魚や移殖魚の侵入などにより、田園に生息する魚類の絶滅危惧種が急増するなど生態系の崩壊が懸念されている。

基調講演や話題提供では、ため池や農業水路における魚類の生息実態や市民による再生活動の取り組みとほ場整備で失われた水田の産卵場や稚魚生育場としての機能復元を目指す農業関係者の取り組みを紹介する。

これを受けてパネルディスカッションで、生態系崩壊の背景と問題点を分析し、市民・農民と行政の協働による田園自然再生のあり方について議論する。

2. 主 催 ・ 共 催

主催：NPO法人シナイモツゴ郷の会、立教大学ウェルネス研究所、ナマズのがっこう、メダカリ親の会、全国ブラックバス防除市民ネットワーク

共催：(財)農村環境整備センター、

3. 後 援

日本経団連自然保護基金

財団法人大阪コミュニティ財団

(東洋ゴムグループ環境保護基金)

4. 開 催 場 所

立教大学池袋キャンパス

5. 開 催 期 日

2008年11月29日(土) 13:30~17:30

6. 次 第



講演

- 1 何が田園生態系を崩壊させたか？
近畿大学 細谷和海
- 2 淡水魚のための水田・水路ネットワークの再生
宇都宮大学 水谷正一
- 3 魚類復元による自然再生活動を継続するには？
NPO法人シナイモツゴ郷の会 高橋清孝

パネルディスカッション

座長 全国ブラックバス防除市民ネットワーク 小林 光
話題提供

- 1 ブラックバス駆除とゼニタナゴの復元
宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 藤本泰文
- 2 ため池環境保全によるニッポンバラタナゴの保護
NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会 加納義彦
- 3 里親制度によるヒナモロコの復元
ヒナモロコ里親会 大石 敏
- 4 水田魚道で田んぼの産卵場を復元
ナマズのがっこう 三塚 牧夫
メダカリ親の会 中茎 元一

シナイモツゴ郷の会の企画編集 第2弾!

恒星社厚生閣から近日発刊

魚類復元による田園の自然再生 (仮題)

魚たちのゆりかご田園地帯の自然は開発や外来生物の侵入により崩壊の危機

現状、自然再生のノウハウ、再生モデル、調査方法を豊富な図と写真で詳述

全国で取り組まれている先進的な自然再生活動を紹介

「花巻・矢沢地域の自然保護を考える会」

との交流会に参加して

門間忠良

春、恒例となった「シナイモツゴ郷の会」の移動研修会が、陽光きらめく4月26日に「伊豆沼、内沼環境保護財団」藤本泰文氏の案内により開催されました。鹿島台公民館を出発したバスは、一路北に向かって進み釜石自動車道に入り、北上高地を間近に見る花巻空港ICでおりました。R286を東に進むと三角錐のきれいな里山が目に見え込んでいます。その麓が花巻市矢沢地域であります。

中島輝雄氏を代表とするグループは、藤本氏と共に2000年ごろから共同で地域の自然保護に取り組んでいます。ゼニタナゴの生息する地域の保全管理に努め、特に休耕田をゼニタナゴの保護地として活用し、希少野生生物の保護増殖活動に努力されておられます。また2006年には、水資源行政の推進に功績があった団体として表彰を受けられ、自然環境保全を積極的に取り組んでいる方々の集まりです。



ゼニタナゴ（雄）：東北地方の代表的な淡水魚、生息地が20箇所以下に減少して絶滅が危惧されている。

バスを降り林道を歩くと、山側に枯れ落ち葉のない清冽な流れの水路があり、枝打ちされた木々が適度な間隔でスクッと立ち、よく手入れされた森が続いています。里山のふもとに小さな池があり、ゼニタナゴの生息地となっております。この池から採取し、休耕田を利用し保護増殖活動をしているとのこと。さらに畑の土手にはたくさんのタンポポが咲いており、石井女史が「この花は西洋タンポポではなくエゾタンポポですよ」教えてくれ、見分け方や（注1）エゾタンポポは春だけ、西洋タンポポは1年中花を咲かせていることなども話してくれました。久しぶりに見た日本

種のタンポポでした。改修された大きなため池の下の水路は、グループの提言により在来種の保全を考えた設計で造られており、ゼニタナゴを放流した休耕田や、周囲の水路にも工夫がなされており今後が楽しみです。民家の軒下には、枝打ちや間伐された薪が堆く積まれてあり里山が生活の中に息づいています。

一回りし戻ると、家と山林との間の空き地にお母さんたちが、野点の準備をして歓迎してくれました。お手製のお干菓子と薄茶の心配りに感謝しながら、小1時間ほど歩いた身体を程よく癒しながら頂くことができました。昼食を共にしながらの意見交換会は、百年の知己のような雰囲気の中で互いの有している情報の公開や、悩み、今日の感想など和気藹々の中で進み再開を約し矢沢地域を後にしました。

矢沢地域には豊かな自然が、そこに暮らす人々と共にあります。里山や溜池を管理しているようにみえるが、自然の木々をあるがままに生かしながら、その中に生活の匂いがあり利用すべき自然の恵みがあります。エゾタンポポが春に黄色の花を咲かせ、秋にはオスのゼニタナゴが腹部を茜色に輝かせ泳いでいる。ほんの少し前までは、田舎のどこにでも見られた風景が少なくなってきました。自然との共生が、閉ざされた世界ではなく、人と人の間に溶け込むような形で維持されているのが矢沢地域です。私達の身の回りにこのような地域がどんどん増えていくような社会であって欲しいと思います。

注 エゾタンポポ：総苞外片が、反り返らない
西洋タンポポ：総苞外片が開花中、反り返る。

会費納入のお願い

一般会員 2,000円、賛助会員 1,000円

里の沼（ため池）のその後

長谷川 政智

宮城県北部で初めて見つけた昔ながらの里の沼について平成 18 年発行のシナイ通信 9 号で報告した。この沼では小鮒、モツゴ（移植種）、タイリクバラタナゴ（外来種）、ジュズカケハゼ、トウヨシノボリ、ヌカエビそしてメダカを見つけとても喜んだ。しかし、この沼に通い始めて 3 年が過ぎ、20 cm くらいのブラックバスが 20 匹くらいの群れで水面にいるのを初めて確認した。近くの沼沼ではブラックバス釣りが盛んに行われていた。しかしこの沼までは距離で 2 km 以上離れていてしかも水源も異なる。それらの沼沼から魚自身の力で入ってくる事はまず考えられない。ではいったい……。そうである、密放流による可能性がかなり高い。なぜかという、今までは、ブラックバスを釣る人の姿が見られなかったが、ブラックバスを確認した年からは、ポツポツとブラックバスを釣る人を見かけるようになった。しかも、わざわざ遠くの仙台からもだ。私は、駆除のため、休みの日に釣りをし、ブラックバスを 5～10 匹ほど捕獲排除していた。しかし、釣り上げる数とそこで繁殖するブラックバスの数では月とすっぽんである。そもそもブラックバスは、1 匹のメスが数千の卵を産み、そのほとんどが孵化しそして天敵のいない沼では多くが親になる。その次の親たちが同じく数千×親（メス）の数の卵を産み、数年で爆発的に数を増やす。孵化した幼魚が親になるためには、当然エサが必要である。エサは、なにか？この沼を観察して最初にヌカエビがいなくなったことに気づいた。次に、沼につながった水路で泳いでいたメダカの姿が見えなくなった。たくさんいたジュズカケハゼの姿も見えなくなった。水路でメダカと一緒に泳いでいたたくさんのタイリクバラタナゴも見えない。しかも、沼でもほとんど確認できなくなった。また、ある季節には、たくさんのトウヨシノボリが水路を遡上する姿が見られたが、この姿も今は見られなくなった。トウヨシノボリも他の水性動物や小魚を捕食するが、どんなにたくさんのトウヨシノボリがいて

もそこにはしっかりと食物連鎖によってそれぞれの生物が確かに生きていた。 去年まで、それでもかろうじて生き残っていた食用カエルの子供（大きなオタマジャクシ）がまだいっぱいいた。もしや、まずくてブラックバスも捕食しないのか？と考えていたが、今年はその大きなオタマジャクシさえも沼から姿を消し、ブラックバスも進入出来ない沼につながった浅い畦にわずかに生き延びているだけだ。もちろん、その畦の生態系も大きく変わった。その畦は、タイリクバラタナゴの稚魚が大きくなるまでそこで過ごしたり、ヌカエビが畦の深みで冬を過ごしていたがその姿も見えなくなった。もちろんメダカの数もほとんど確認できなくなった。その代わり、今年、フナの子魚が確認できた。少しは安全ということか？……。しかし



ブラックバスが放流され繁殖したため池

ここも決して安全とは言えず、水位が上昇すればブラックバスも進入可能である。そのため、ここで生き残っているわずかな生物も姿を消す日が来る……。今この沼には、ブラックバスしかいない。正確には、大きなフナ・コイもいるが……。

今、このような沼がわずかに数年で形成されることに本当に驚かされ、これが現実であって確実に、在来生物が絶滅の過程にあることは否定できない。少しでも多くの在来生物を救う為にも、多くの人の手が今必要です。何が出来るのか？……。近くの NPO の窓をたたいてみてはいかがでしょうか。

生き物観察会

深谷地区の子供たち

大崎市鹿島台の深谷地区で開催された田んぼの生き物調査に参加した子供たちの感想文を紹介します。

高橋君

7月20日に生き物調査がありました。みんなで集まって、郷の会の人たちがきてくれました。さいしょはせつめいをして、調査をはじめました。

さいしょは家の周りにある川にいきました。そして、あみで大きい**オイカワ**という魚をとりました。とてもうれしかったです。そして次の川へいってあみですくってみたら小さい**メダカ**がいました。

しかも赤ちゃん**エビ**がいました。

とてもびっくりしました。

さいごの川にいくとザリガニが1匹いました。そしてザリガニをつかまえました。

調査が終わり、かえって郷の会の人にいろいろお話をきいたりして、あみをもらって、とても楽しかったです。

鹿野さん

わたしは、今まで川で遊んだことはあるけど、友だちといっしょに「あっ とれたよ」なんていいながらやるとなんだかだんだん楽しくなってきました。

川の中にはほんとにいろいろな魚や**えび**ほかにもいろいろいるんだということがわかりました。これもみんなが楽しんでやったことやたくさんの先生たちのおかげです。今日はあまりたくさんとれなかったけど魚のことをいろいろ教えてもらいました。たとえばある魚（名前をわすれた）*は、**かい**にたまごをうむということと**メダカ**はぜつめつきぐしゅということ

鹿島台 大文化祭

11月1～2日 鹿島台鎌田記念会館

ほかにもいろいろおしえてもらいました。*事務局注* 貝に産卵するのは**タナゴ**類です。

佐藤君

ほくは、川の生き物調査にさんかして、とてもべん強になったことがありました。ぼくの住んでいる深谷地区には、色々な魚がたくさんいるということです。今日とれた魚のうち**オイカワ**や**メダカ**がいたのでびっくりしました。メダカはキレイな水の所でしか、生きていけないので、近くの川にいるとは思いませんでした。

また、**シナイモツゴ**の話を聞いて、**ブラックバス**をたいじして、シナイモツゴをまもっている事を知りました。学校でもシナイモツゴをかつているので今までいじょうに大切にしていきたいと思います。

とても楽しい調査だったので、また来年もしてみたいと思います。そして、今度は深谷の川で本物のシナイモツゴを見てみたいです。

荒さん

私は今日7月20日日曜日に深谷川の生き物調査をしました。

さいしょに生き物がいっぱいっているずかんをもらい、そとに出て、緑色のあみをもらい、さっそく走って川へ行きました。足がよごれるからいやだと思ってたけどがんばってはいってみると、やっぱりどろがぬるぬるしてちょっときもちわるかったけど、楽しかったです。

エビはたくさんいてはねていてとてもかわいかったです。場所をかえてみて、あみでとって見ると、自分がとった魚の中で一番大きいのがとれたけどけがをしていたので川へかえしました。

さいごはみんなでジュースをもらいべんきょうしました。

とても楽しい一日でした。



各地で実施される生き物調査
鹿島台竹谷地区（2008年7月）

日本の湖沼の生態系を取り戻したい! ドリーム-カ- : 高橋副理事長

TBS「夢の扉」のお勝手口 6月29日全国放送

伊豆沼バスバスターズ 池田洋二

皆さんこんにちは、伊豆沼バスバスターズの池田洋二と申します。去る6月29日、やっとTBS「夢の扉」にて高橋さんの回が放映されました。取材日数1年以上・・・長かった・・・皆さんご覧になった方が多いと思いますが、如何だったでしょうか？1年以上の長いロケを通し、取材スタッフが我々の考えや行動を肌で感じ取って下さったためだと思いますが、高橋さんを含め普段我々が思っていること等を映像化して下さったように感じ、大変好感が持てました。内容的には皆さんご覧になってよくご存知だと思いますので、今回はこの夢の扉の取材に微力ながら協力させて頂き貴重な体験をさせていただきました際のお話を少し書きたいと思います。題して「夢の扉のお勝手口」さてさて始まります。

1 水中撮影のボツ話

思えば1年前の2007年4月に高橋さんからこの企画と取材があることを教えていただきました。今まで、伊豆沼でバス駆除活動を行なっていて、何度もTV局の取材は来ましたが、ほとんどが、ニュース関連で、こういったドキュメンタリーの番組は初めてです。

しかも民放ローカル局ではなく中央局。夢の扉と言ったらドリームナビゲーターは

お約束、大橋マキさんだったら絶対2ショットとサインは確定だね！(何気にファンです)などと不埒な妄想を抱きつつ伊豆沼に向かいました。

朝の作業ミーティングの前、高橋さんから取材スタッフの「T」さんを紹介していただきました。挨拶を交わすと早速Tさんが今回の番組の意図や狙いを話してくださいました。



Tさん「早速ですが池田さん。高橋さんから映像関係に詳しいとお聞きしました。

それで、今回の番組の中で、ブラックバスが実際に伊豆沼で人工産卵床に卵を産んでいるシーンを撮影したいのですが大丈夫ですか？」

私 「え？・・・い・伊豆沼で・ですか？」

Tさん「やっぱりどうしてもこのシーンははずせない

夢の扉 DVD

見逃した方にお貸ししますので

事務局へご連絡ください。

です。何とかありますか」

私 「あの・・・水の中に入ると、上から見ると違って結構水が澄んでいるところでもかなり透明度は悪くなりますよ。伊豆沼だと恐らく1cm前が見えないと思います。」

Tさん「何とかありませんか？」

私 「うーん。風が吹かない等よほど条件が良ければ、何とかなるかもしれませんが

それでも視界はせいぜい10cm程度だと思いますよ」

Tさん「じゃあ来週、風が止んでくれると想定して水中撮影機材持ってきます。撮影お願いできますか？」

私 「あくまで条件がよければです・・・それと持って来る水中カメラはなるべく軽いのにしてください。海とは比重が違いますから」

Tさん「判りました♪軽い機材ですね♪」

かくして翌週、彼が持ってきた水中カメラは何と20kg近い大型システム。・・・

しかも晴天なれど強風・・・

だから・・・軽いのにしてくれって言ったのに・・・しかも日頃の行いのせいか強風で湖面が波立って水は濁りが凄い

でも折角持ってきたんだからということで、伊豆沼へダイブ突撃・・・ブクブク

結局何も映らずこの企画はあえなくボツとなりました。

2 放送禁止用語

伊豆沼での駆除作業を撮影している時の事。

高橋さんが先行して作業を行なっている我々に指示をします。

高橋さん「バスが違和感を感じると、産卵しないかもしれないので堀跡があった産卵床の碎石はリセットしないでそのままに置いて下さい。」

私 「了解しました。碎石はリセットせずに放置プ〇〇でいいんですね♪」

撮影されているのも忘れいつもの調子で下ネタ連発で受け答えをしていると、撮影をしていたプロデューサー氏からダメだしの一言「すいません。今までの会話、放送禁止用語があまりに多すぎて使えません・・・(怒)自重してください。」

プロデューサー様その節はスマセンデシタ

3 鷺巣あやのさん

今回のドリームナビゲーター役だった彼女。何回も撮影に伊豆沼に来てくれ、すっかり仲良しに。ウェダーを履いてカッパを着込み出番待ちのところをパチリ！カメラを向けると、ちゃんと業務用のスマイルに。さすがプロですね



4 「インビ」と言う魚

オンエア1日前の晩Tさんから電話

Tさん「すみませんちょっと教えて欲しいのですが、今テロップ(字幕の事)をつける作業をしてまして、地元の方が昔は伊豆沼でインビという魚を沢山捕って食べたと言っているのですが、インビってどんな魚ですか？」

私 「?・?・方言ですか? 聞いたこと無いですね。ちょっと調べてみます」

しかし、誰に聞いてもインビの正体が判らない。インビって一体どんな魚なんだ? こうなれば仕方ない。カメラの前でインビをとって食べたと言った本人に電話をして尋ねて見ると 本人いわく「インビ、エンビ、海老だっちゃ!」。正体が判ったのと無事通訳が出来たことでホッとしました。

里親コーナー

今回は宮城県鹿島台商業高校です。

PTA会誌から抜粋させていただきました。

シナイモツゴがきた!

職員玄関前で、いらしたお客様に尾を振ってご挨拶してくれる、かわいい奴を知っていますか?

彼が7月から、鹿商の仲間入りした「シナイモツゴ」君です。一見、メダカと見間違えそうなのですが、正真正銘、大崎市の天然記念物! シナイモツゴは旧品井沼で大正時代に発見されたことから、名付けられ、今では絶滅危惧種にあげられる貴重な魚なのです。

そんな訳で、市内にある「シナイモツゴ郷の会」では、旧品井沼の自然を守るために保護の重要性を地域の皆さんに理解してもらう活動として、シナイモツゴを保護しています。

今回、本校もその趣旨に賛同し少しでも「環境問題を考える」切っ掛けになれば……、と生徒会&商業研究班がせっせとモツゴ君のお世話をしているのでございます。

学校に来た際には、事務室脇のモツゴ君を是非覗いてやって下さい。本当にかわいい鹿商の人気者なのであります。



シナイモツゴBCC通信から（No119：4月20日配信）

みなさま

伊豆沼の湖畔、満開の桜の下で伊豆沼バス・バスターズの活動が始まりました。

昨年、当会と伊豆沼・内沼環境保全財団の共同研究で開発した2段式人工産卵床による省力化実証試験が今年のメインテーマです。

是非、ご参加ください。

イベント情報

1 移動研修会

花巻のゼニタナゴを守るグループを訪問します。

定員 25 名、残り 3 名となりましたので早めに申し込みください。

会費 500 円（ガソリン代など）、情報交換をかねて地元の食堂にて昼食を 700 円/一人で予約済み。

期日：4月26日（土）

団体名：花巻・矢沢地域の自然保護を考える会

スケジュール

8：00 鹿島台公民館出発

（マイクロバス乗車）

17：00 鹿島台着

2 里親小学校繁殖池整備

期日と集合場所決定しました。

時間作れる方はご参加ください。

4月25日（金）鹿島台小AM9：00

3 伊豆沼人工産卵床設置

4月27日（日）9：00

伊豆沼サンクチュアリセンター

＊鹿島台から出発の方は8：00 鹿島台公民館集合

4 里親が育てたシナイモツゴの放流会

5月下旬 鹿島台深谷ため池

成果情報

1 定例会・理事会

4月19日（土）に開催しました。

バス・バスターズやひし栽培水田の水管理当番などを決めました。

2 伊豆沼バス・バスターズ

今年の駆除スケジュール打ち合わせや人工産卵床の組み立て作業に参加しました。

今年は学生さんがたくさん参加し、若い力がみなぎっています。

新型人工産卵床の成果もとても楽しみです。

NEWS！

路上でシナイモツゴ発見

先日、朝の犬の散歩中の出来事です。

近くの住宅分譲地の中の道路で、足元を見るとなんと2尾の魚が飛び込んできました。

眼を凝らしてみると、何とシナイモツゴだったのです。

写真をご覧ください。

マンホールの蓋に堂々と2尾のシナイモツゴが踊っています。

合併前の鹿島台町のマーク入りです。

「たくさんの人に大事にされるようになったのだなあ」と少し胸が熱くなりました。



シナイモツゴ BCC 通信

会員の情報共有を図るため、毎月2～3回メール配信しています。配信を希望される方は事務局へメールでお知らせください。BCC通信ではシナイ通信をカラーで見ることができます。

シナイはアイヌ語で大きな川（沢）を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。